

『叡山大師伝』研究の現状とその問題点の整理

小山田和夫

はじめに

- 一、『叡山大師伝』に関するこれまでの研究―福井康順氏の研究まで―
- 二、『叡山大師伝』諸写本の複製公刊
- 三、史料公刊後における『叡山大師伝』研究の現状
- 四、『伝教大師行業記』をめぐって
- 五、『比叡大師伝』一卷と『比叡大師行迹』一卷
おわりに

はじめに

伝教大師最澄の伝記としては、『叡山大師伝』を初めとし、『類聚国史』巻一七九・仏道六・諸宗・嵯峨天皇弘仁十三年六月癸亥(四日)条(『日本後紀』同条逸文)、円珍が仁忠の記文を撮要したという『伝教大師行業記』(『比叡山延暦寺元初祖師行業記』)、宗性の『日本高僧伝要文抄』第二・「伝教大師伝」、『三宝絵』、鎮源の『大日本法華験記』巻上・

第三・叡山建立伝教大師条、『扶桑略記』所引「伝教大師伝」、醍醐寺所蔵『深要法花験記』上巻・伝教大師第四、三善為康の『拾遺往生伝』巻上・伝教大師条、『伝教大師行状』、『阿婆縛抄明匠略伝』日本上・伝教大師条、虎関師鍊の『元亨釈書』巻第一・伝智一之一・延暦寺最澄条などが知られている。

『日本高僧伝要文抄』第二・「伝教大師伝」以下の最澄の伝記は、ほぼ『叡山大師伝』に拠っていると考えられ、それゆえこれまでの伝教大師最澄の伝記研究は、文書及び『叡山大師伝』を中心として行われてきたのである。この『叡山大師伝』に関する研究は、三浦周行氏編纂『伝教大師伝』（一九二二年三月、平安考古会）伝記解説（一五頁）において、

大師の門弟仁忠の撰にして、大師伝中最も古く、且つ最も委曲を尽せるものなり。仁忠の伝は明かならざれども、大師の門弟中上座の一人に数ふべき人なりしが如し。古来大師の伝記にしてこの右に出づるものなく、多くはこれに拠りて敷衍せるに過ぎず。

石山寺に本書の古写一卷を伝ふ。なほ明和四年の刊本あり、四大師伝の一に収む。宝永元年秀雲の序あり。近くは御遠忌事務局より出版せる延書本あり。

という評価を受けて以来、伝教大師最澄研究の根本史料の一つとして、その伝記研究においては活用されてきたものの、『叡山大師伝』そのものに関する基礎的な研究は、その後、大屋徳城氏の「石山寺所蔵旧鈔叡山大師伝に就いて」〔叡山学報〕第七輯掲載、一九三三年十一月）によって初めて行われたのである。この研究はその後全く無視され、戦後における蘭田香融氏による研究、すなわち「最澄の山林主義」〔顕真学苑論集〕第四七号―梅原勸学古稀記念特輯―掲載、一九五五年十一月）の余論「叡山大師伝の錯簡及び流传について」を待たねばならなかったのである。

蘭田香融氏の研究の後しばらくの間、『叡山大師伝』そのものに関する研究はなかったものの、近年に至り、史料

の複製刊行という非常に慶ばしい出来事が相次いでいるのである。

一九七一年四月には、宝永四年（一七〇六）書写の山口光田氏所蔵本が同氏によって複製刊行され（この写本の冒頭部分と奥書部分の写真は、はやく一九三七年二月刊行の『台山餘輝』第五輯の巻頭口絵において紹介されていた）、さらに中西随功氏によって『叡山大師伝』の新たな校訂が施され、石山寺所蔵『叡山大師伝』の写真版と仲尾俊博氏の訳注が加えられ、仲尾俊博氏著『山家学生式序説』（一九八〇年七月、永田文昌堂）の中に収められて公刊された。一九八一年十月には、日蓮聖人第七百遠忌を記念して、中山法華経寺より、同寺所蔵の『叡山大師伝』の複製本が刊行され、またその写本を考察した寺尾英智氏の「中山法華経寺蔵『叡山大師伝』及び紙背文書」（『古文書研究』第二六号掲載、一九八六年十二月）が公表され、ここに古写本の多くが学界の共有財産となったのである。

ここでは、『叡山大師伝』に関するこれまでの研究成果をまとめ、その問題点をあげてみることにしよう。

一、『叡山大師伝』に関するこれまでの研究——福井康順氏の研究まで——

先に記したとおり、『叡山大師伝』の古写本研究は、三浦周行氏編纂『伝教大師伝』（一九二二年三月、平安考古会）伝記解説（一五頁）において、石山寺所蔵の古写本が紹介されたことに始まり、それを底本として翻刻した比叡山専修学院附属叡山学院編纂『伝教大師全集』第五卷所収本の刊行（一九二七年七月、比叡山図書刊行会。天台宗宗典刊行会編纂『伝教大師全集』別巻——一九二二年十二月刊行のものは、明和四年の版本を底本としている）によって、平安時代中期の書写にかかる現存する最古の『叡山大師伝』を利用する研究は開始されることとなった。

しかしながら、改定史籍集覧第一二冊・別記類第一（一九〇二年初版、一九六八年三月復刻、すみや書房）、続群書類従

卷第二〇五・伝部一六（統群書類従完成会本第八輯下所収、一九〇四年十月）、日本大蔵経第四六卷・天台宗顕教章疏二（一九二〇年五月、日本大蔵経編纂会。増補改訂日本大蔵経では、第七六卷・天台宗顕教章疏四）に収録されて流布している『叡山大師伝』などとの記述順の相違については、三浦周行氏編纂『伝教大師伝』においては何ら問題とされることはなかったのであるが、一早く、末廣照啓氏の「叡山大師伝考」（『山家学報』創刊号・第三号掲載、一九一六年六月・一九一七年二月。のち御遠忘布教材第一輯として刊行された末廣照啓氏編『訳注叡山大師伝』附録に所収、一九一七年六月）において、宝永元年板本の錯簡に言及され、記述錯雑を嘆き、仁忠の真撰か否かを疑う人もいるという状況についても論述されている。その後刊行された末廣照啓氏編・本多綱祐氏補『訳注叡山大師伝』（一九三五年六月）では、石山寺本によって、本文の前後が訂正されているのである。すなわち石山寺本には、「不任慶躍之至、敢奉表陳謝、以聞輕犯威嚴、伏増戦慄、謹言。又同年九月七日、（中略）庶百代之下、歌詠無窮、千載之外、瞻仰無絶。」（『伝教大師全集』第五卷所収本一一頁四行目から一二頁九行目）の順に記載されているのに対し、統群書類従巻第二〇五・伝部一六に収録されて流布している『叡山大師伝』（統群書類従完成会本第八輯下所収、四六二頁から三頁）では、「不任慶躍之至、敢奉表陳謝、千載之外、瞻仰無絶。（中略）又同月十二日、（中略）乃可以聞輕犯威嚴、伏増戦慄、謹言。又同年九月七日、」という順に記されており、後者の場合には、その記載の年次においても自己矛盾を生じ、これによって、最澄の事跡が異なってくるのである。

『叡山大師伝』諸写本の調査にはよらず、その叙述に錯誤混雑のあることを指摘し、それを前後の記事より訂正したのは、境野哲（黄洋）氏の「伝教大師伝に就いて」（『新仏教』第一四巻第二号掲載、一九一三年二月。のち同著『仏教史論』所収、一九一六年五月、丙午出版社）が最初である。氏は、「『本伝』の叙述が非常に錯誤混雑があつて、殆んど領会に苦しむ所少くない。従来人の之に気が付かなかつたのは不思議に堪へない」と述べられ、その該当記事の部分を訂正

して最澄の事跡を考えられたのである。

この境野哲（黄洋）氏と末廣照啓氏の指摘を何故三浦周行氏編纂『伝教大師伝』が無視したのかは、不明であるが、菊岡義衷氏は「山家大師年表史」（『山家学報』第七号掲載、一九一八年二月）の中で、次のように記しておられる。すなわち、

山家大師伝は古来より数本あれども、記事簡にして要を得ざるものあり、或いは繁にして史実に合せざるものあり、就中叡山大師伝は仁忠師が親しく侍して、能くその行業を識知して記されたるものなれば、伝記中の醇の醇なるものなり。然るに原文は漢文体にして前後錯雑して其意味を解し難き所ありしも、幸い近頃此れに訳注を施し加ふるに伝考及年譜を附して、従来錯雑せる個所を補正せられたるは、誠に読者の為に便益する所鮮からざるのみならず、深く撰者の勞勩を思はざるべからざるなり。

というように、その名を明記しないものの、明らかに末廣照啓氏の研究を示しており、これを評価する方もおられたのである。

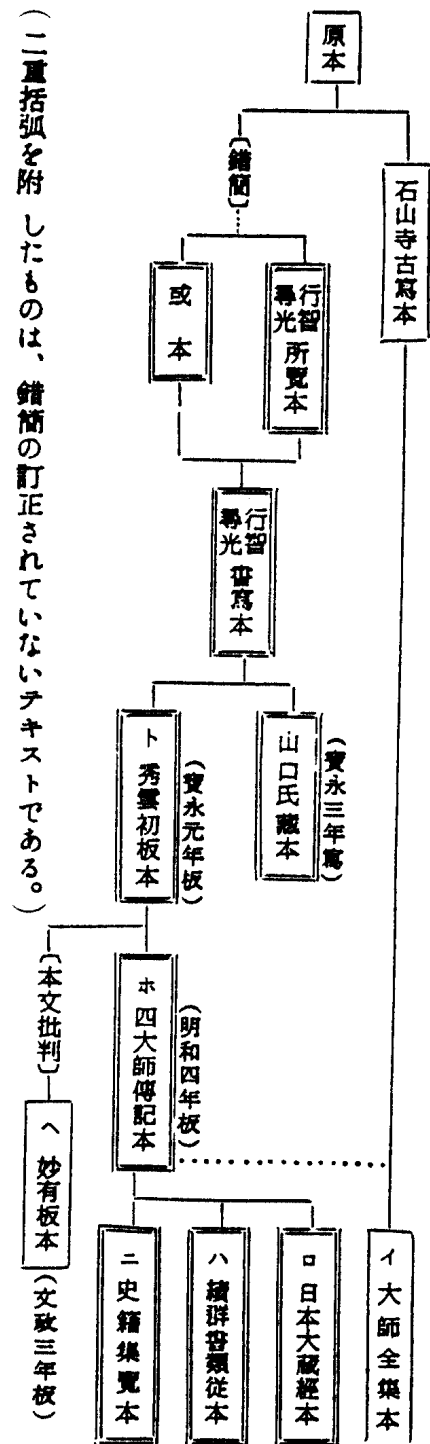
この流布本『叡山大師伝』の錯簡について、さらに本格的に言及をしたのは、大屋徳城氏の「石山寺所蔵旧鈔叡山大師伝に就いて」（『叡山学報』第七輯掲載、一九三三年十一月）であり、また本多綱祐氏の「伝教大師伝文献に就いて」（『歴史公論』第六巻第二号）特輯「伝教大師」掲載、一九三七年二月）、続く藺田香融氏の「最澄の山林主義」（『顕真学苑論集』第四七号）梅原勸学古稀記念特輯―掲載、一九五五年十一月）の余論「叡山大師伝の錯簡及び流伝について」である。

大屋徳城氏は、一九二二年八月二十三、四の両日、石山寺において同寺所蔵の『叡山大師伝』について、詳細に調査され、その成果を公表されたのである。（梅田円鈔氏の「宗祖研究雜観」△『台山餘輝』第五輯掲載、一九三七年二月）によれば、石山寺本は大屋徳城氏が発見されたものであり、その校正表を使用して、藤枝氏氏が『伝教大師全集』の再版の際に訂

正したという。)氏は、明和四年(一七六七)の版本との異同を指摘し、諸本によって校訂を加えた版本は、文字の誤謬は少ないものの、錯簡があり、これに対して古写本である石山寺本は誤字が多いものの、版本に見られる錯簡がないことなどを指摘されたのである。

本多綱祐氏は、伝教大師最澄に関する諸伝を整理し、最も古い『叡山大師伝』の撰者の件から、秀雲の四大師伝記の成立事情に至るまでを考え、これまで見てきた錯簡問題についても触れ、秀雲の使用した原本が凡そ一紙ほどの部分を前後したまま、その誤りを発見することなく刊行したのであると推測し、その記述の正確な順序を指摘し、そして『訳注叡山大師伝』においても、修正を行ったことなどについても述べられている。

藺田香融氏は、この錯簡は最澄個人に関するばかりでなく、天台宗史の上からも、重大な盲点であったことを指摘するとともに、石山寺本を初めとする諸写本の位置付けを行い、さらに石山寺本が錯簡のない正しいテキストであることなどの他、仁平二年(一一五二)四月十日の本奥書を有する宝永三年(一七〇六)四月十二日書写の山口光円氏所蔵本を紹介され、流布本に見られる錯簡がかなり古くから存在した点、そして平安時代の末期には、錯簡のある写本が一本のみならず、「或本」をも含めて合計二本存在していたことを証明されたのである。氏が表示された『叡山大師伝』の系統は次のとおりである。



(二重括弧を附したものは、錯簡の訂正されていないテキストである。)

ついで『叡山大師伝』について触れられたのは、上村真肇氏である。氏は「叡山大師伝に於ける問題」(『印度学仏教学研究』第一〇巻第二号掲載、一九六二年二月。のち同著『法華経を中心とする仏教教理の諸問題』所収、一九八〇年九月、春秋社)において、末廣照啓氏、大屋徳城氏、蘭田香融氏の研究成果を踏まえ、『叡山大師伝』にのみ見える寿興について、誤写の可能性も含みつつ、考察を加えられたのである。

さらに『叡山大師伝』について、その撰者についての疑問も提出されたのである。それは山口光田氏である。氏は所蔵の仁平二年(一一五二)四月十日の本奥書を有する宝永三年(一七〇六)四月十二日書写本の複製に際し(一九七一年四月)、まず『叡山大師伝』の錯簡問題について触れ、蘭田香融氏が指摘された点を述べ、次に写本の冒頭に、「釈一乗忠撰」と記されている撰者について、これを本文中に見える「上座仁忠」であると断定することには様々な疑問を持つ旨述べられたのである。

『叡山大師伝』の撰者については、塩入亮忠氏が『仏書解説大辞典』第一巻(一九三三年五月初版、一九六五年二月改訂再版、大東出版社)二五八頁、山田文昭氏が『群書解題』第二(一九六一年十一月初版)第四卷上、一九八一年十一月

三版、統群書類従完成会）一九四頁において述べられているとおり、一般には「仁忠」と考えられてきたものの、ここにその撰者に対する疑問が提示されたのである。

この撰者の問題については、牛場真玄氏が、「『叡山大師伝』の成立について―特にその序文を中心として―」（天台学会編『伝教大師研究』所収、一九七三年六月、天台学会・早稲田大学出版部）において、その撰者が「一乗忠」というだけで、これを『叡山大師伝』の本文中に見える「仁忠」と考えることは、根拠薄弱であることを指摘されており、さらにその序文（宝永甲申秋八月初四日の比叡山西塔東溪沙門秀雲のもの）に検討を加えられ、また伝の内容についても批判され、その結論を次のようにまとめられたのである。すなわち、

一、その撰者とされている仁忠なる人物を歴史上に発掘することは困難であること。

二、序及び伝の文体から見て、平安初期の成立とは考えがたいこと。

三、序と伝とは、文体の相似と思考の類型から、同一の著者と推定されること。

四、序及び伝の用語・用句・句法・章段・関節・発想・構想・思想・論理の展開、それに対応する行文・叙述などにおいて、日本的よりも、むしろ中国的なところが、より多く看取されうること。

五、本伝の中には、多くの矛盾や疑問、史実に違った所が多く見出されること。

六、その叙述が頗る不明確で、特に時間・空間の限定に鮮明さを欠くところが多い。論理―叙述の飛躍を心理で補充する傾向は、中国文の特徴でもあるが、本文にはそのような点が、相当誇張されている。

七、そうした不鮮明さは、架空―創作の場合ほど筆が渋滞し、その真意の把握に惑わされる所が多いこと。

八、本伝は、漢文の伝記としては、各宗祖師の漢文伝記の中でも、文章的に最も洗練されていて、その文学性も豊かなために、その疑問や矛盾の発見を、鈍化させるに益立っているのではなからうか。

という見解である。

氏の提示された疑問点の数々に対し、いちいち解決の方法を示すことは省略するが、氏の疑問の出発は、光定の『伝述一心戒文』には、鎌倉時代の写本（金沢文庫本）が現存しているのに対し、大師伝すなわち『叡山大師伝』には、鎌倉時代はおろか、伝の初めての刊行年であるの宝永（一七〇四）以前の写本が一つも現存していないことにあるという（六七頁）のであるが、これが全くの誤解であることは明白であるので、これ以上述べるのは避けることにしよう。撰者の問題にしても、その撰号が「一乗仁忠」というのが原型であったならば、それはどのように考えるのであろうか。「一乗仁忠」とあったものを誤って「一乗忠」と写す可能性も十分に考えられるのである。

牛場真玄氏は別に「『叡山大師伝』における二三の問題点」（『南都仏教』第三〇号掲載、一九七三年六月）において、石山寺本『叡山大師伝』について次のように述べられている。すなわち、

『叡山大師伝』には謂わゆる石山寺本なるものが、最も信憑性があるごとく云われているが、これについては、福井康順博士のすでに指摘されているように、誤写の多いものであるばかりでなく、後代において擬作された可能性が相当大きい、と考えられる。

というように、未見の石山寺本『叡山大師伝』を後代における擬作の可能性が大きいと評されているのである。

氏は別に「『伝述一心戒文』の成立についての疑——最澄・光定の上宮廟献詩を中心として」（『南都仏教』第二六号掲載、一九七二年六月）の中でも、『叡山大師伝』の成立と撰者仁忠という問題を考察され、結論的には、仁忠という人物の架空性と大師伝の擬作性を述べているのである。

それでは牛場真玄氏が先に引用された福井康順氏の研究とはどのようなものなのであろうか。福井康順氏は、嗣永芳照氏の「伝教大師伝に関する一、二の考察」（『歴史教育』第一三巻第五号掲載、一九六五年五月。のち塩入良道・木内堯

央両氏編日本名僧論集第二巻『最澄』所収、一九八二年十二月、吉川弘文館）とは関わりなく、独自に最澄の生誕年時についての研究を行われ、一九六七年十月二十八日、大正大学を会場として開催された第九回天台宗教学大会において、「宗祖大師降誕年時考」と題した研究発表をされ、その概要は、同年十一月九日付の『中外日報』に、「伝教大師ご降誕年時考」と題して公表されたのである。またこの研究発表が天台学会の機関誌に掲載される以前の一九六八年二月四日付『朝日新聞』において福井氏は、「伝教大師の生年考」と題して、同様の論旨すなわち、最澄は通説である『叡山大師伝』や『伝述一心戒文』が告げる弘仁一三年（八三二）六月四日、五十六歳で入滅したということに基づいて、逆算して求めた神護景雲元年（七六七）に生まれたのではなく、実は天平神護二年（七六六）に誕生したことを主張されたのである。この結論は、先に記した嗣永芳照氏の「伝教大師伝に関する一、二の考察」と同様のものである。この福井氏の見解に対して山口光田氏は、一九六八年三月三日付『朝日新聞』において、反論を加えられたが、再び福井氏は三月二十六日付『中外日報』等において、「伝教大師ご降誕年時考」（再論）と題した反論を加え、また前年の研究発表を正式に、「宗祖生誕年時考」（『天台学報』第一〇号掲載、一九六八年十月。のち前掲『最澄』所収）と題した論文にまとめられたのである。

こうした伝教大師最澄の生誕年時をめぐる論争は、様々な波紋を投げかけ、勝野隆信氏の「公式文書における信憑性の問題―伝教大師生誕年時の問題を中心に―」（『仏教史研究』第三号掲載、一九六八年十一月。のち前掲『最澄』所収）「伝教大師最澄生誕年時の問題」（同上第四号掲載、一九六九年十二月）という福井氏への反論も発表されるに至ったのである。この論争はその後さらに続くのであるが、この論争の経過と結末については、別に記したことがあるので、ここでは省略したい（拙稿「平安仏教と最澄・空海研究」／『古代史研究の最前線』第四巻・文化編下所収、一九八七年二月、雄山閣出版）。

石山寺本『叡山大師伝』に対して、牛場真玄氏のような懐疑的な論考が出されるようになったひとつの原因は、福井康順氏が「叡山大師伝考」（『天台学报』第一一号掲載、一九六九年十月）「叡山大師伝の性格」（『印度学仏教学研究』第一八卷第二号掲載、一九七〇年三月）「叡山大師伝の再検討」（『天台学报』第二二号掲載、一九七〇年十月）「伝教大師生年考新議」（天台学会編『伝教大師研究』所収、一九七三年六月、天台学会・早稲田大学出版部）「叡山大師伝をめぐる二三の問題」（『天台学报』第一五号掲載、一九七三年十月）「宗祖伝についての諸相」（『天台学报』第一八号掲載、一九七六年十一月）などにおいて、『叡山大師伝』の信憑性を論じられ、また石山寺本『叡山大師伝』についても、平安時代の古写本ではあるものの、著しい誤写があること（一五七箇所）などを指摘されたことに端を発しているものと思われる。

これら一連の福井康順氏の論考について、先に記した伝教大師最澄の生誕年時以外の点を中心に、次に見てみよう。福井康順氏は石山寺本『叡山大師伝』について、非常に誤字が多いこと、また誤脱が多く見られることを指摘され、石山寺本と宝永版本とを比較検討の上、宝永版本の方が善本であることを示されているのである。また末廣照啓氏あるいは蘭田香融氏が指摘された石山寺本には錯簡が見られないという点については、それを認めつつも、蘭田香融氏が「これ（石山寺本）は錯簡のない正しいテキストであるという点ばかりでなく、他の点から見ても正確度の高い、そして書写年代も古いものではないかと想像される。」と評価されたことについては、正に誤解であるという見解を示されたのである。さらに氏は、『叡山大師伝』は原本と今本とに区別されねばならぬことを主張され、今本は転写による誤字もしくは脱字などが多く、それゆえ一字一句までもそのまま信用することはできないと論じられるのである。

福井康順氏の研究はそれまでほとんどなされなかった基本的な史料を再検討した点、すなわち従来無批判に利用してきた『叡山大師伝』に対して、その初めての史料批判論文として、研究史上に銘記される必要があるが、同様の結

論を導き出した嗣永芳照氏の論考を看過した点は残念であるといわざるを得ない。

『叡山大師伝』の成立年代やその書名等についても氏は、通説的な最澄入滅後程遠くない時期という理解に対し、これ以前にも最澄の伝が存在している可能性もあること、また仁忠一人の作業ではなからうという新説を提示されているのである。また『叡山大師伝』という書名について、円珍が抄出した『比叡山延暦寺元初祖師行業記』より、まず疑念を抱かれ、さらに平安時代末期の『扶桑略記』に「伝教大師伝」として引用されていることから、大師号授与以前に成立した原本には、別の名称が付けられていた可能性もあることを示唆されている。撰者の問題についても氏は、題名の下に「釈一乗忠撰」とあることより、これを一般に「仁忠」と見ている点に疑問を抱かれ、「釈一乗忠撰」とは実は「真忠」のことであることを論述されているのである。

福井康順氏は、その後蘭田香融氏らが提示された「照千一隅」説に対する反論を「蘭田教授著『最澄』についての駁議―「照千一隅」問題を中心として―」（『天台学报』第一六号掲載、一九七四年十月）「照千一隅」の問題について」（『大法輪』第四一巻第一〇号掲載、一九七四年十月）「照千一隅」問題についての結論」（『天台学报』第一七号掲載、一九七五年十一月）などにおいて展開され、また円珍が抄出したという『伝教大師行業記』についても、『伝教大師行業記』について」（『天台学报』第一九号掲載、一九七七年十一月）と題する論考を発表され、さらに『叡山大師伝』には記されていない最澄の遺言についての研究、すなわち「伝教大師の『弘仁三年遺言』について」（『天台学报』第二〇号掲載、一九七八年十一月）「伝教大師の遺誠『不打童子』考」（『天台学报』第二一号掲載、一九七九年十一月）も公表されているのである。

福井康順氏は一九九一年一月に遷化されたが、その晩年に至るまで精力的に研究活動も展開し、従来主張されてきた『叡山大師伝』に関する学説をまとめ、「新修伝教大師伝考」（同氏監修・天台学会編『伝教大師研究別巻』所収、一九八

○年十月、天台学会・早稲田大学出版部)「伝教大師伝研究要略」(『天台学報』第二六号掲載、一九八四年十一月)「叡山大師伝についての検討」(『天台学報』第三二号掲載、一九八九年十月)を発表されたのである。ここに再度氏の研究をまとめておこう。

福井氏はまずこれまでの論考の中で主張されてきた点、すなわち第一に『叡山大師伝』の撰者「一乗忠」とは、古来からの定説である上座「仁忠」ではなく、最澄の高足「真忠」であろうと推定されること、第二に『叡山大師伝』に見える最澄の父「百枝」とは、最澄の度縁など三通の公文書に見える「浄足」であり、伝にはもともと「巨枝」と記載されていたのではないかと推定できること、第三に最澄の弘仁三年の遺誠を宗門は軽視しているが、それが偽作ではないこと、第四に平安時代末期の『叡山大師伝』は、現行の『叡山大師伝』とはかなりの相違があったという点この問題については、『扶桑略記』所引「伝教大師伝」という名称及びその本文を例として推定し、それらについて再度論及されているのである。

福井康順氏が指摘された諸点に対して、真っ向から反論を加えた論考は、管見には入らない。氏が提起された幾つかの問題点について、今はそれらを再検討することは本稿の性格から不可能であるが、こうした極めて基本的な問題が再度論及されるということは、以前にも述べたように、従来の研究が、基本的な史料に対する批判を疎かにした結果であることを如実に物語っていると言えるよう。

氏が提起された点の多くは、伝教大師最澄研究において再度検討される必要のあるものばかりであり、前掲「伝教大師伝研究要略」の最後に附記された十五の問題も同様であると思うのである。

二、「叡山大師伝」諸写本の複製公刊

『叡山大師伝』の諸本のうち、一九三六年には、前田育徳会尊経閣文庫所蔵本が、関靖氏編『金沢文庫図録』(一九三六年初版、のち日本書誌学大系一九・『金沢文庫本之研究』第三部所収、一九八一年十二月、青裳堂書店)の第一五五図(四九二頁)として、紹介された。関靖氏は、断巻一葉しか存在しないこの鎌倉時代の写本を、その柱書に「山家伝」と見えることから、書名を仮に『山家伝』と名付け、その来歴についても、延宝の頃(一六七三〜八一)、前田松雲公の架蔵となったのではないかと推測されたのである。

金沢文庫本の来歴とその典籍、特に外典については、納富常天氏の「東国仏教における外典の研究と受容」(『金沢文庫研究』第二三九号掲載、一九七六年六月。のち同著『金沢文庫資料の研究』所収、一九八二年六月、法蔵館)という研究があり、釵阿・全海・釈十蔵らによる写得であることが指摘されている。

翌一九三七年には、天台宗開創千百五十年を記念して編集・刊行された『台山餘輝』第五輯の口絵として、山口光円氏所蔵本の巻頭部分及び巻末部分の写真を掲載し、次のような解説を加えている。すなわち、

本口絵は山口光円師の秘蔵するところにして、此処には其の初紙と奥書を御紹介致しました。本大師伝は仁平年間に書写批校せられたものが(奥書の裏紙に宝永三年四月十二日書写畢、藤原武済とあり)更に宝平年間に伝写されたものである。尚本伝は綴本にして、一紙二十行、十七字詰で写経風を採り、序文は無く、本文は総て四十二枚、奥付一枚に成つて居り、句読は朱を以て三様に用ひ、中間にあるのはコンマ、右方にあるのはピリオド、左方にあるのは軽い意味の句点である。此れを石山本其の他と比較するに、送仮名とも多少の相違があり、又其の打ち

方、切り方に於て多少の誤謬が無いでもない。兎に角研究すべき価値を充分有するもので、時恰も開創記念に当り、学者の大いに研究すべき珍本として御紹介申し上げる次第であると記されている。

『叡山大師伝』の諸本研究は、大屋徳城氏、蘭田香融氏以来全く行われてこなかったものの、一九七二年四月には、蘭田香融氏の「最澄の山林主義」(『顕真学苑論集』第四七号―梅原勸学古稀記念特輯―掲載、一九五五年十一月)の余論「叡山大師伝の錯簡及び流伝について」の中でも再度紹介された山口光円氏所蔵本が、京都・一乗寺曼殊院内天台学問所よりまず複製刊行された。

金沢文庫本の全文が紹介されたわけではないが、高橋秀栄氏によって、「金沢文庫昭和五十二年度文化財修理―二、典籍⑤叡山大師伝」(『金沢文庫研究』第二四巻第六号―通巻二五四号掲載、一九七八年十二月)と題する金沢文庫所蔵『叡山大師伝』についての詳細な報告がなされた。その中で、従来『山家伝』という書名で知られていたものが、このたびの修理により、初丁の最初の行に、右半分を破損して失っているものの、新たに「叡山大師伝」と判読できる内題の文字を確認したことが報告されたのである。さらに氏は、従来の「山家伝」という書名は、正式の書名ではなく、各丁の柱、つまり糊代部分に墨書されていた別号書名を採用した便宜的なものであったことが知られるという関靖氏の指摘された点、また前田育徳会尊経閣文庫所蔵の『山家伝』は、金沢文庫保管のこの『叡山大師伝』の一部(四丁目に該当する)で、江戸時代初頭に称名寺から流出したものであること、さらに金沢文庫本と石山寺本とを比較検討した結果、字句の出入りが随所に見られ、石山寺本とは別系統の写本であることを指摘されたのである。

なお、前田育徳会尊経閣文庫所蔵の『山家伝』(二丁)についても、その名称が『叡山大師伝』と改められたことが、飯田瑞穂氏の「尊経閣文庫架蔵の金沢文庫本」(『金沢文庫研究』第二七九号掲載、一九八七年九月)によって知られ

る。

続いて、中西随功氏によって『叡山大師伝』の新たな校訂がなされ、石山寺所蔵『叡山大師伝』の写真版と仲尾俊博氏の訳注が加えられ、仲尾俊博氏著『山家学生式序説』（一九八〇年七月、永田文昌堂）の中に収められて公刊された。中西随功氏は、石山寺所蔵『叡山大師伝』を底本として、これに『叡岳四大師伝』所収本（明和四年）、妙有版本（文政三年）、続群書類従所収本、山口光円氏所蔵本、京都大学人文科学研究所所蔵本（延宝二年書写）の五本を使用して校訂作業を行われたのである。

この中西随功氏による『叡山大師伝』の校訂は、比叡山専修学院附属叡山学院の編纂である『伝教大師全集』第五卷（一九六八年二月、日本仏書刊行会）に収められた『叡山大師伝』（底本は石山寺本、対校本は『叡岳四大師伝』所収本）と同様、古写本を重視するもので、これによって新たな研究の基本作業がなされたのであるが、中山法華経寺所蔵本はともかく、既知の金沢文庫本及びその一部である前田育徳会尊経閣文庫所蔵本が使用されなかったことは、惜しまれてならないのである。

氏はまた『叡山大師伝』の諸本の系統を次のように表示されているので、次頁に引用しておこう。

さらに慶ばしいことは、重要文化財に指定されている石山寺所蔵『叡山大師伝』の写真版が、仲尾俊博氏の御尽力により、同著『山家学生式序説』（前掲）の中にすべて収録されたことで、これによって文化財の保全も可能となり、いながらにしてその片影をうかがうことが出来るようになったのである。

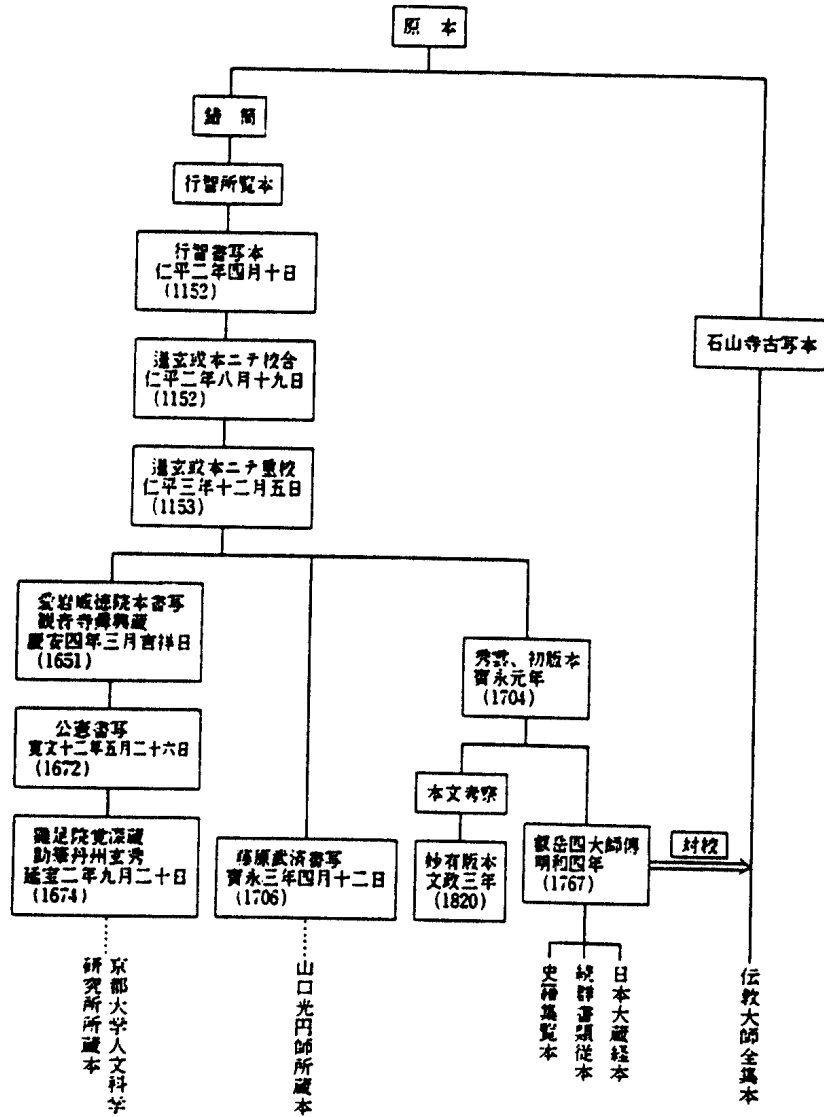
一九八一年十月には、日蓮聖人第七百遠忌を記念して、中山法華経寺より、同寺所蔵の『叡山大師伝』の複製本が作成され、従来秘蔵されてきた諸典籍が研究にも活用されることになり、一九八三年六月二十五、六の両日に開催された第十六回日本古文学学会学術大会（於立正大学）においても、「日蓮関係資料展」が開かれ、『叡山大師伝』の複

『叡山大師伝』研究の現状とその問題点の整理

製本も展示公開された。

また中山法華経寺本について考察した寺尾英智氏の「中山法華経寺蔵『叡山大師伝』及び紙背文書」(『古文書研究』第二六号掲載、一九八六年十二月)が発表され、同本の写真版とその翻刻とが対照出来る形式で公刊されたことは、今後の伝教大師最澄研究をより前進させるものとなるであろう。

こうして『叡山大師伝』は、石山寺本と中山法華経寺本という二つの古写本が複製公刊され、また新たな校訂本も



登場したわけであるものの、金沢文庫所蔵の『叡山大師伝』及びそれと同一のものである前田育徳会尊経閣文庫所蔵二丁については、依然として研究には活用されてはならず、またその詳細な研究も登場してこないのである。

三、史料公刊後における『叡山大師伝』研究の現状

まず挙げるべきものに、一九八六年に発表された今成元昭氏と寺尾英智氏の研究論文がある。この二篇の論考については、『史学雑誌』第九六編第五号掲載―一九八六年の歴史学界Ⅱ回顧と展望―（一九八七年五月）六七―八頁において、

一乗忠と仁忠とを別人と考え、両者とも最澄の伝を編纂したという新説を提示された今成元昭「最澄」（『国文学解釈と鑑賞』五一の九）、中山法華経寺本の翻刻に続き、書写年代と人物を推定し、同本を諸本中へ位置づけした上で、原著者を一乗仁忠とした寺尾英智「中山法華経寺蔵『叡山大師伝』及び紙背文書」（『古文書研究』二六）は、蘭田香融氏以降ほとんどなされていなかった最澄伝に関する示唆に富んだ研究である。中山法華経寺本に明記されている撰者名と今成氏の推論とがどのように融合・展開していくのか。今後の研究の進展に期待したい。と評したことがある。いささか不十分な記述であるので、次に両氏の研究を詳しく見てみることにしよう。

今成元昭氏は右の「最澄」（『国文学解釈と鑑賞』第五一卷九号掲載、一九八六年九月。以下①とする）を発表された後間もなく、「仁忠撰『最澄伝』新考」（『立正大学大学院紀要』第三号掲載、一九八七年二月。以下②とする）を発表されており、ここでは併せて、その論旨を見ることにしよう。

①論文は、最澄伝の成立と展開を考察することに主眼があり、まず「最澄の伝記はまず直弟子仁忠によって作られ

た。その原本は散佚したが、石山寺所蔵の平安時代末期写本や沙門秀雲の序を持つ宝永元年（二七〇四）刊本の『叡山大師伝』として今に伝えられている」という通説の検討から始め、『叡山大師伝』の「釈一乗忠撰」と伝本文中の弘仁十二年五月十五日付属書に、「一乗忠」と「仁忠」とが並記されていることを根拠とし、兩人が別人であることは明白であることをこれまでの研究と同様確認され、次に仁忠の最澄伝を抄録した円珍の『比叡山延暦寺元初祖師行業記』と仁忠の最澄伝との関係を考察され、一乗忠の伝は現存の『叡山大師伝』（『日本高僧伝要文抄』所引「伝教大師伝」）にその全貌を、また仁忠の最澄伝は、円珍の『比叡山延暦寺元初祖師行業記』にその縮図を見得るといふ仮説を提示し、それを中心として論証されたのである。

①論文では、最澄の没後間もない頃、弟子中の上座仁忠が粉飾の少ない最澄の正伝を作成したものの、この伝記は高踏的性格ゆえ、広く流布することはなかった。しかしながら、円珍の藤原基経への進奉の例に見るように、公的な庭では原拠として利用された。平安時代の後期に最澄の「本伝」として伝わっていたのは、この系統の本であるという。そして仁忠の後輩一乗忠は、仁忠の最澄伝の文辞を多少修補して流麗にし、靈驗奇瑞談を取り入れて、文学性の豊かな最澄伝を作成した。この書は多くの人々に迎えられ、内容に多少出入りのある異本や種々の抜書を生み、『叡山大師伝』とも『伝教大師伝』ともいわれたこの系統の書は、先の「本伝」に対して「別伝」と称されたが、最澄伝の主流の座を獲得したのであるという説であり、これら二点にその論説を集約できよう。

この今成氏の学説の一部は既に福井康順氏らによって指摘されている点もあるものの、これ程まで明確に、最澄伝の系統について論理的に記述された説は、これまで見られず、極めて注目し得る学説であると言えよう。

さらに今成氏は②論文において、円珍の『比叡山延暦寺元初祖師行業記』と『叡山大師伝』との関係を中心に考察された。まず両書が古代社会において、どのような形で享受されてきたかを『拾遺往生伝』『扶桑略記』所引の伝を

挙げて、『拾遺往生伝』における最澄の伝の本文は、『比叡山延暦寺元初祖師行業記』とは内容においても表現においても、かなりの距離の隔たりが存在するものの、『叡山大師伝』とは非常に近い関係にあるということを論述され、次に『扶桑略記』所引の最澄の伝「伝教大師伝」十七項目について、『叡山大師伝』との関係を考えられ、『扶桑略記』が「已上本伝」という形式で引用したものと「已上传文」という形で引いたものとの相違点を指摘された上で、「已上」と注記されている各項目は、『叡山大師伝』に依拠していること、「已上传文」「已上本伝」と注記されている各項目は、『叡山大師伝』に非常に近いが、それ自体ではないことなどの最澄伝に依拠していること、『伝教大師伝』として引かれている書は、『叡山大師伝』に非常に近いが、それ自体ではないことなどを論証されたのである。

②論文は次の問題として、一乗忠撰『叡山大師伝』と仁忠撰『原最澄伝』とは、同一か否かという命題の検討に進み、現行『叡山大師伝』と『比叡山延暦寺元初祖師行業記』とを比較して、その相違部分を剔抉し、それが一本の伝写過程で起こり得る態のものであるか、あるいはその限度を超えるものであるかを検索することによって、一つの推論が得られるという考えの下で、次のような結論を導き出されたのである。すなわち『扶桑略記』が引用する「本伝」は、『叡山大師伝』と重複している本文を多く有しながらも、『比叡山延暦寺元初祖師行業記』のみとの共通語句・事項を含むものであることが明確となり、『比叡山延暦寺元初祖師行業記』をもって、仁忠撰『原最澄伝』の面影を多く留めるところの直系の伝写本であったと推断することができるというのである。

最後に今成氏の論考が結論とする最澄の伝の系統をまとめると、次のようになろう。すなわち、最澄の没後三年を経た頃、上座仁忠による祖師の行業の記（氏はこれを仮に『原最澄伝』と命名した）が編纂された。この書は、史実を重視した荘重で手堅い伝記であったため、公儀の庭に引かれはしたものの、それ自体には広く世人の関心を買うような魅力に乏しかった。そして間もなく、この仁忠撰『原最澄伝』の欠を補うような形で、一乗忠撰『叡山大師伝』は成

立を見た。この書は、仁忠撰『原最澄伝』を基本とし、他方靈驗奇瑞談の類をも多く採録して、最澄の偶像化とその宗教の神秘化を推進し、人々の宗教的渴仰心や文学的興味を満足させるものとして広く伝播し、多方面に多くの影響を及ぼしたのである。この二書すなわち、仁忠撰『原最澄伝』を「本伝」、一乗忠撰『叡山大師伝』を「別伝」と見、両書はその性格と成立の事情から、「本伝」「別伝」と通称されたが、世間的に主導権を握っていたのは、専ら「別伝」の方であり、それは『伝教大師伝』などの類書を生む母胎ともなったと説かれるのである。

寺尾英智氏は「中山法華経寺蔵『叡山大師伝』及び紙背文書」(『古文書研究』第二六号掲載、一九八六年十二月)において、『叡山大師伝』の抄出本である中山法華経寺所蔵本の書写年代について、第六丁裏に見える識語に、常師(日常)筆と記されていることから、本写本の筆跡と日常のそれとを比較し、これが日常のものであるということをも推定し、そして日常が永仁七年(一一九九)三月二十日に入滅していることより、この入滅時を書写の下限年代とまず推定し、次に紙背文書を考察して、その書写年代の上限を建長元年(一一四九)に求められたのである。さらに氏は、古来から撰者として挙げられてきた仁忠を否定する見解が出されている現状に対し、この中山法華経寺所蔵『叡山大師伝』冒頭には、「釈一乗仁忠」と記載されている事実を挙げ、「福井康順氏が指摘され今日通説化しつつある、仁忠とは別人の選述になるという説に対し否定的な論点を用意するものとして注目に値する。」と主張されたのである。

これとは別に佐伯有清氏は、『慈覚大師伝の研究』(一九八六年五月、吉川弘文館)第六章「叡山大師伝にみえる外護の檀越」の注(一)(三八〇頁)において、次のように『叡山大師伝』の撰者についての結論を示しておられる。すなわち、

釈一乗忠は、これまで最澄の門弟の一人である仁忠とみなされていたが、釈一乗忠は、仁忠とは別人であって、弘仁十年十二月五日成立の最澄撰の『内証仏法相承血脈譜』の末尾に、「一乗仏子、真忠筆受」とみえ、また弘

仁九年七月二十七日付の義真真蹟とされる「比叡山寺諸院別当三綱」と題する文書に、「少別当真忠」とみえる真忠がそれであるという福井康順氏らの説（『新修伝教大師伝考』、『伝教大師研究』別巻、三八二―三八四頁参照）が、妥当であろう。円珍が元慶五年七月二十日に記した『比叡山延暦寺元初祖師行業記』の末尾で、「此拠寺別当藤納言閣下召祖師行記。撮故僧仁忠記文進奉」云々と書いているのは、本伝の巻末のところ、院内之事。円成仏子。慈行仏子。一乗忠。一乗叡。円信等。可相莊行。且附上座仁忠并長講法華師順円申送」と記したことに引かれ、誤って真忠と書くべきところを仁忠としてしまったのであろう。

と述べられているのである。佐伯有清氏は、『円仁』（一九八九年三月、吉川弘文館・人物叢書）四五頁において、『比叡山延暦寺元初祖師行業記』の「乃有信心仏子数住人」云々の中の無行と仁忠の間に、仁徳の名を挙げていることについて、それは仁徳が円珍の叔父にあたることによるものであろうと推測され、この点についてはさらに『智証大師伝の研究』（一九八九年十一月、吉川弘文館）第二章「円珍の同族意識」（五一―三頁）の中でも、それは、円珍の同族意識に基づく私情によってなされたものであったことも否定できないであろうと推測されているのである（このことは、同著『円珍』△一九九〇年七月、吉川弘文館・人物叢書▽二四九頁にも記されている）。

佐伯有清氏は『円珍』二四七―八頁において、元慶五年七月二十日に成立した『比叡山延暦寺元初祖師行業記』の末尾に見える「藤納言閣下」を初代の延暦寺俗別当藤原三守に比定する最近刊行された小方文憲氏の「比叡山延暦寺元初祖師行業記」（『日本仏教典籍大事典』所収、一九八六年十一月、雄山閣出版）における説を批判し、「藤納言閣下即今時太政閣下」と続けて記されていることから、これは明らかに藤原基経のことを指していることを指摘されているのである。この点については、既に本多綱祐氏が「伝教大師伝」（天台宗大学編纂『天台講習録』②所収、一九二〇年二月、浅草寺内天台発行所）において指摘しており、佐伯氏は続いて、「藤納言閣下が藤原基経である」とすると、円珍が祖師

最澄の『行業記』を、仁忠（実は真忠）の『叡山大師伝』を撮要して「藤納言閣下」の求めに応じたのは、元慶五年七月のことではなかったことになる。基経が「太政閣下」すなわち太政大臣に任ぜられたのは、元慶四年十二月であったから、翌年七月の時点で、円珍が「藤納言閣下」と記すはずはない。基経が中納言になったのは、応天門の変後の貞観八年（八六六）十二月であり、また大納言に昇進したのは、同十二年（八七〇）正月であった。そして同十四年八月には右大臣に任ぜられている。したがって基経が「納言」在任中に、円珍は、最澄の『行業記』をしたためたのであった。」という成立年代をも推定されているのである。

続いて、川勝賢亮氏の「伝教大師四本の考証」（『九州史学』第八六号掲載、一九八七年三月）が発表された。

川勝氏は、『叡山大師伝』、『比叡山延暦寺元初祖師行業記』（『伝教大師行業記』、『拾遺往生伝』所載「伝教大師伝」、『扶桑略記』所引「伝教大師伝」の比較検討を行い、各伝の作成意図及びその性格を考察されたのである。また福井康順氏の撰者「真忠」説に対して、『叡山大師伝』の作者は仁忠が一番ふさわしいことを論述し、『比叡山延暦寺元初祖師行業記』（『伝教大師行業記』）は、仁忠の伝に依拠しつつも、それに漏れたり、誤りのあるものを修正したり、付け加えたものであることなどを述べられたのである。

筆者は、「十一世紀から十三世紀にかけての延暦寺における僧伝編纂の一例」（平成二・三年度文部省科学研究費補助金—一般研究A—研究成果報告書『仏教史料の体系的把握に関する基礎的研究』所収、一九九二年三月、立正大学）において、『伝教大師行業記』についても触れ、従来指摘されている「字葉澄」「乃有信心仏子数十人」の他、「十五補国昌寺僧」という記事について、『叡山大師伝』との相違点を考え、『伝教大師行業記』は、『叡山大師伝』をそのまま抄出したものではないことを確認した。その際には述べなかったことであるが、「乃有信心仏子数十人」という記述については、石山寺本と山口光田氏所蔵本『叡山大師伝』の記事と続群書類従本『伝教大師行業記』のそれとを挙げ、円珍が叔父

僧「仁徳」の名を加えていることを確認したが、石山寺本には『伝教大師行業記』と同様、「乃有信心仏子數十人」とあり、その人数の記述の仕方が一致していることは、『叡山大師伝』には元来「数十四人」とあり、それを円珍が都合よく人数をぼかして記載したとばかりは言えないのではないかという推測をするに至ったのである。無論円珍が、石山寺本にも見えない「仁忠」を追加した可能性は、十二分に考えられ、前稿の内容を訂正する必要はない。

四、「伝教大師行業記」をめぐって

先に見たとおり、今成元昭氏によって、『比叡山延暦寺元初祖師行業記』すなわち『伝教大師行業記』をもって仁忠撰『原最澄伝』の面影を多く留めるところの直系の伝写本であったと推断することができるという説が新たに提出されたので、ここで『伝教大師行業記』に関する研究史をまとめておく必要があるろう。

三浦周行氏編纂『伝教大師伝』（一九二二年三月、平安考古会）伝記解説（一五―一六頁）において、

智証大師円珍の撰にして、仁忠の伝（『叡山大師伝』のことを指す）に比較すれば略伝とも謂ふべし。此書の末に「此拠寺別当藤納言閣下召祖師行記撮故僧仁忠記文進奉、藤納言閣下即今時太政閣下也」と見えたるに拠るも、撰述の由来と仁忠の伝に拠りたること明かなり。藤納言とは始めて延暦寺別当に任ぜられし一人なる権中納言従三位兼行皇后宮大夫左兵督藤原朝臣三守なり。然るに此書を以て仁忠の伝に比較するに、多少の異同なきにあらず。例せば国昌寺、常住寺の名の叡山大師伝に見ゆる処と少しく異なるが如し、猶其条下に言及すべし。

本書の撰述年代は「元慶五年七月二十日、比丘円珍記」との識語によりて、これを明かにすべし。元慶五年は大師示寂後五十九年にして、円珍の六十八歳の時とす。円珍は讃岐国那珂郡の人、弘法大師の血族にして、弘仁五

年を以て生る。天長四年十四歳の時出家して京に入り、翌年比叡山に登りて、座主義真に師事せり。智証大師年譜をはじめ、元亨釈書、本朝高僧伝等に其伝あり。

と述べられたのが、初期の研究の代表例であるが、それ以前の本多綱祐氏の「伝教大師伝」（天台宗大学編纂『天台講習録』②所収、一九二〇年二月、浅草寺内天台発行所）では、「藤納言閣下即今時太政閣下也」と見えるその該当人物を「太政大臣藤原基経」に比定している点において、異なっている。

この『比叡山延暦寺元初祖師行業記』の最古の写本は、寛喜元年（一一三九）十一月十一日に書写された興福寺所蔵の『延暦寺智行高僧伝』の中に収められたものである。それには「比叡山延暦寺（以下欠落）」と記されており、この写本を初めて紹介した堀池春峰氏（『延暦寺智行高僧伝』について）／『南都仏教』第一七号掲載、一九六六年六月。のち同著『南都仏教史の研究』下・諸寺篇所収、一九八二年四月、法蔵館）は、この欠失部分を補われ、「比叡山延暦寺元初祖師行業記」とあったものと推定されている。

『延暦寺智行高僧伝』の中に収められたものは、最澄の入滅の記事で終わっており、その奥書部分はない。奥書部分の有する写本のうち、古い写しの部類に属するのは、統群書類従巻二〇五・伝部に収められて流布している『伝教大師行業記』と称するもので、文明十一年（一四七九）十月十九日の書写にかかるものである。『伝教大師全集』第五（一九六八年二月、日本仏書刊行会）所収『比叡山延暦寺元初祖師行業記』は、天明三年（一七八三）四月十三日の書写奥書を持つものであるため、ここでは、奥書部分がある写本の中では、最古の写本である統群書類従巻二〇五・伝部に収められているものの名称、すなわち『伝教大師行業記』という名称を使用することにして、以下記述することにした。

この『伝教大師行業記』について、最初に論及されたのは、多門亮深氏の「祖師行業記の誤謬」（『台山餘輝』第五輯

―天台宗開創千五十年記念特輯号掲載、一九三七年二月〕である。

多門氏はこの論考の中で初めて、『伝教大師行業記』の撰者と伝えられて来た智証大師円珍について疑問を投げかけられたのである。すなわち智証大師円珍の撰に於ては、本書があまりに杜撰であり、はるか後世の漢文の作り得ななくなった頃のものとも推測されたのである。そして次に『叡山大師伝』と『伝教大師行業記』とを比較検討され、最澄の入滅後の記載のないこと、さらに公文書・準公文書・私文書等が一切省略されていることを挙げ、『伝教大師行業記』と『叡山大師伝』との間に大いなる相違が見られることを指摘されたのである。また「藤納言閣下」に所望されて製作したものであるならば、たとえそれが抄録であっても、もっと忠実に原本を読まねばなるまいとその内容を批判し、その疎漏の例を数点挙げ、さらに誤謬の数々も指摘されているのである。

そして『伝教大師行業記』末尾の「故僧仁忠記文」が示すのは、『叡山大師伝』であるものの、『叡山大師伝』には、単に「一乗忠撰」とあるのみで、それを「仁忠」であると推定してきた根拠となったこの『伝教大師行業記』奥書、この書自体が偽作であるということが明確になった以上、「一乗忠」を「仁忠」であるとする根拠は全くなくなったと説かれるのである。

この多門亮深氏の研究は、前述した大屋徳城氏の研究と同様、その後無視された感があるが、多門氏の論考を福井康順氏が取り上げたことによって、改めて注目されるようになった。

福井康順氏は、「叡山大師伝をめぐる諸問題」〔『天台学報』第一五号掲載、一九七三年十月〕の注（八）において、「なお、仁忠撰説に対しては、別の角度からして疑義を投じている多門亮深師の論もある、という。未見。別稿において論及したい。」と記され、その後、「宗祖最澄伝についての諸相」〔『天台学報』第一八号掲載、一九七六年十一月〕において、この多門亮深氏の論考を評価し、氏が課題とした「一乗忠」という人物について、新たに「真忠」に比定された

のである。

福井康順氏は次に、「伝教大師行業記について」(『天台学報』第一九号掲載、一九七七年十一月)を發表され、この中で先の多門亮深氏の論考を詳細に検討し、多門氏が推測した諸点を批判し、偽撰説は是認できぬことをまず指摘されたのである。また『伝教大師行業記』奥書に、

此拠寺別当藤納言閣下、召祖師行記、撮故僧仁忠記文進奉、

とある「仁忠」に注目し、外護者である藤原三守の求めに応じて、円珍が伝教大師最澄の伝記を抄録した際に、その伝記の作者を誤って記すことなどなからうとし、「仁忠」とは元来は「真忠」とあったものの、それが後世転写される間において、「仁」が「真」に変わったのではなからうか、と推測されるのである。(氏の論旨から言えば、「真」と元来あったのが「仁」に変化したというのが正しく、おそらくは誤記であろう。)この推測の根拠は、従来からしばしば用いられる史料で、『伝教大師行業記』に『叡山大師伝』の次の一文を引いていることから知られるという。すなわち、

自今以後、一家学生等、一事已上、不得違背。(中略)院内之事、(中略)一乗忠、一乗叡、円信等、可相莊行。且附上座仁忠、並長講法華師順円申送。

とあるように、明らかに「一乗忠」と「仁忠」とが並記されているという事実である。

さらに福井氏は、三井寺円満院所蔵の義真和尚真蹟の中に、「少別当真忠」の名が見えていることを挙げ、円珍としては、真忠の名は決して無縁ではなかったと推測されるのである。また、『伝教大師行業記』には「円信」とあるのに対し、『叡山大師伝』には「円仁」と相違の見られる点については、「初期日本天台史を検討する場合、実は興味ある一つの示唆を与える。けだし、それは不用意な相違ではなくて、『円仁』の存在を強く打ち出そうとしている故意の改字であろう、とも見られるからで、或はおもりに、『仁忠』という誤写においても、そうした心情が潜んでい

るのではなからうか。」と述べられているのである。

福井氏はさらに『伝教大師行業記』について次のように推測される。すなわち『伝教大師行業記』に、

祖師、諱最澄、字藥澄、諡伝教大師。

とある記事に注目し、「祖師」は『叡山大師伝』では「大師」となっているが、大師号勅賜以前ゆえ「祖師」の方が順当であり、それはその下に「諡伝教大師」と記しているので、あえて避けたものとも考えられるが、異様さが感じられないとし、さらに「字」については、『叡山大師伝』には全く見えぬ、『伝教大師行業記』独自の記事であること指摘し、澄の一字が重複するのは問題が残るが、その第一行にこれを書いていることは、省略し得ない確固たる事実であったと推測されているのである。

こうした福井康順氏の見解に対し、痛烈な批判をしたのは、勝野隆信氏の「伝教大師最澄生誕年時の問題」(『仏教史研究』第四号—高柳先生追悼記念号掲載、一九六九年十二月)であり、主題である最澄の生誕年時の問題を除外して見てみると次のとおりである。

勝野氏は、福井氏が末廣照啓氏の研究を逆用している点のあること、すなわち末廣照啓氏は「故に予は文章の錯雑あるとも、仁師(仁忠)の真作たるを疑う者にはあらざるなり」というように、石山寺本を評していることを取り上げて、まず福井氏の石山寺本への批判を独断的な見解とこれを退け、福井氏が『叡山大師伝』に「大師」と今記されているのは、もとは『伝教大師行業記』のように「祖師」とあったと推測する点に対しても、勝野氏は、これは円珍がもとの大師を祖師と書き替えたたと推論されるのである。字の問題についても、勝野氏は、本来の『叡山大師伝』にも『伝教大師行業記』の中にもなかったもので、後人の書き入れであろうと推定されているのである。また福井氏が、『叡山大師伝』は、弘仁十四年夏六月条に見える講復の座に上る人々の中、仁忠の上に仁徳の名を抜かしており、『叡

『叡山大師伝』の誤脱著しい例として挙げている点について、勝野氏は、これは、円珍が『伝教大師行業記』を記すに際し、『叡山大師伝』に「信心の仏子の数十四人」とあるのを「十数人」と書き替え、これに特定の人物仁徳を加えたものと考えられ、その理由として、円珍は、最澄の臨終のその劇的な場面に、門下生の叔父僧仁徳を加えたものと推定されたのである。それゆえ、人数をぼかしておく必要があったのであろうというのである。

このような研究がある中で、前節において見た今成元昭氏の学説、すなわち最澄の没後三年を経た頃、上座仁忠による祖師の行業の記（氏はこれを仮に『原最澄伝』と命名した）が編纂された。この書は、史実を重視した荘重で手堅い伝記であったため、公儀の庭に引かれはしたものの、それ自体には広く世人の関心を買うような魅力に乏しかった。そして間もなく、この仁忠撰『原最澄伝』の欠を補うような形で、仁忠撰『原最澄伝』を基本とし、他方靈驗奇瑞談の類をも多く採録した一乗忠撰『叡山大師伝』は成立を見たという見解が新たに提出されたのである。

五、『比叡大師伝』一巻と『比叡大師行迹』一巻

『叡山大師伝』を考える際に、従来全く使用されたことのない史料がある。それは『山王院蔵書目録』である。この目録については、既に佐藤哲英氏によって研究されており、「山王院蔵書目録に就いて―延長三年筆青蓮院蔵本解説」（『叡山学報』第一三輯掲載、一九三七年六月）という極めて優れた考証があり、氏によって、円珍前後に蒐集された典籍千有余部の目録であること、また延喜・延長年間における山王院が所蔵する典籍の全貌も明確となっており、初期天台宗史において重要な目録であることは周知のところであろう。

最近、佐伯有清氏が「円珍と山王院蔵書目録」（『成城文藝』第一三三号掲載、一九九〇年九月）という佐藤哲英氏を超

える詳細な研究を発表されており、この目録は、円珍の門弟である空恵が編纂したものではなく、円珍自身の手になる撰述書であることが、明確となったのである。

この『山王院蔵書目録』の古写本、すなわち粟田・青蓮院所蔵延長三年（九二五）書写本が、佐藤氏の論考とともに、『叡山学報』第一三輯の中で翻刻されており、その「一九九」に、

比叡大師伝 一卷

とあるように、『比叡大師伝』一卷が記されており、その前後には例えば、

「一九六」天長九年維摩会問答 一卷 略注

「一九七」天長十年大極殿金光明会表開題 一卷 寂光

「一九八」妙法蓮華迹本二經大意 一卷

「二〇〇」天台法華宗義集 一卷 「天長末年修禪大師撰、共諸宗集内」

「二〇一」比叡大師行迹 一卷 「依今太政閣下召依本伝抄出」

と記されており、これによって、「比叡大師行迹 一卷」とは、明らかに、円珍が抄録したという『伝教大師行業記』のことを指していることが判明しよう。そして「本伝」というような呼称でもって、その抄録された原本が呼ばれていたこともわかるのである。この「本伝」とは、目録の中に見える唯一の伝すなわち「比叡大師伝 一卷」であることは、確実であろう。

延長三年書写『山王院蔵書目録』によって、知られることは多いが、「依今太政閣下召依本伝抄出」した『比叡大師行迹』一卷、すなわち円珍が抄録したという『伝教大師行業記』は、もとは、『比叡大師行迹』という名称であったこと、そして抄録の原本である「本伝」とは、恐らく『比叡大師伝』一卷であって、目録の第「一九六」番目から

第「二〇〇」番目までが、天長九年（八三二）から天長末年の成立年時が示されていることから推測すると、『比叡大師伝』一巻の成立時期も、この天長年間（八二四～三三）の中に求めることが出来るのではないかということである。そしてこの推測どおりであるならば、円珍が抄録した「本伝」は、もとは『比叡大師伝』と称されていたことも併せて知ることが出来るよう。

おわりに

以上、『叡山大師伝』をめぐる問題点を探るため、これまでの諸先学の研究を回顧することから始めた。ここで、これまでの研究史の中から浮かび上がった問題点の幾つかを整理し、今後の課題にしようと思う。

まず第一に言えることは、『叡山大師伝』の諸本のすべてを検討して、その校訂本を新たに作成する必要があるということである。確かに、石山寺本には幾つかの誤字や誤記も存在するものの、それが現存する最古の写本である以上、これを底本とし、新たに複製本も公刊されている中山法華経寺所蔵本も対校本の一つに加える必要がある。また中山法華経寺本と恐らく密接な関係にあると思われる金沢文庫所蔵本及びその一部である前田育徳会尊経閣文庫本も、その関係を考察した上で、対校本の一つに付け加え、古写本のすべてを網羅した『叡山大師伝』の定本を早急に作成する必要がある。

次に、石山寺本『叡山大師伝』に記されている撰者「一乗忠」と、それとは別の系統に属する仁平二年（一一五二）四月十日という本奥書を有する山口光円氏所蔵『叡山大師伝』に記されている撰者「一乗忠」、そして中山法華経寺所蔵『叡山大師伝』に見える撰者名「一乗仁忠」の問題、すなわち現在知ることの出来る『叡山大師伝』という最澄

伝に見える撰者は一体誰なのかという難題を、円珍が抄録したという『伝教大師行業記』の奥に、「此拋寺別当藤納言閣下召祖師行記撮要故僧仁忠記文進奉、藤納言閣下即今時太政閣下也」と記されている「故僧仁忠記文」との関係において、説明する必要がある。

この『叡山大師伝』の撰者を考えるに際も、先に記した従来全く使用されなかったことのない史料『山王院蔵書目録』の記載書目を検討する必要がある。

そして前節において記した点、円珍が抄録したという『伝教大師行業記』は、もとは、『比叡大師行迹』という名称であったこと、そして抄録の原本である「本伝」とは、恐らく『比叡大師伝』一巻であって、九世紀の段階において、そのような呼称であったことは、伝教大師号を授与された後には、その伝も「伝教大師伝」「伝教大師行迹」という呼称で写す場合も当然考えられ、そうした名称に変化した写本が、『扶桑略記』所引「伝教大師伝」あるいは『日本高僧伝要文抄』第二・「伝教大師伝」に用いられたのであると推測することも、あながち不当ではあるまい。

とすれば、現在多くの写本に付されている『叡山大師伝』という名称は、山口光円氏所蔵本の本奥書の年次ごろ、すなわち仁平二年（一一五二）四月十日という時期の段階で付けられたものと考えてよいのであろうか。

この問題を考えるためには、川勝賢亮氏の研究成果を踏まえ、再度伝教大師最澄に関する諸伝の比較検討が必要であると同時に、仁平二年四月十日以前の書写年時を示す奥書を発見することが必要となろう。また拙稿「十一世紀から十三世紀にかけての延暦寺における僧伝編纂の一例」（前掲）の中でも述べたとおり、『叡山大師伝』の原本の所在及びその写本の所在を考えてみる必要もあるのではなからうか。

博雅の御批正を賜れば幸いである。

〔付記〕

本稿は、一九八四年二月以来、長期にわたって研究課題として来た『平安仏教の成立』の第一次草稿の第一章をもとに、その後の研究成果を加えたものであり、既に同研究課題の第二次草稿の第一章も先年『平安前期天台教団と慈覚大師円仁の研究』（平成二年度文部省科学研究費補助金一般研究）研究成果報告書、一九九一年三月、立正大学）として発表したこともあり、現時点において考えている『平安仏教の成立』の内容とは大幅に異なっているため、また伝教大師最澄の研究は極めて多いものの、基礎的な分析においてなお問題点があると思われるので、ここにその研究史を発表した次第である。

現在、先年出版していただいた『智証大師円珍の研究』（一九九〇年十一月、吉川弘文館）の中で、検討していない『智証大師伝』についても、本稿と同様な研究史の分析から始め、本文の比較検討を加えており、いずれ機会を得て、報告したいと思っている。また本稿の続編である『叡山大師伝』諸本の比較検討成果については、機会を得て、速やかに報告しようと考えている次第である。

（一九九二年五月三十一日）